Vol. 84

薩摩糸びな

―さつまいとびな―

桃の節句を彩るお雛様には、京雛や関東雛のほかに土雛や紙雛など地域独特の郷土雛もあります。その一つが鹿児島の薩摩糸びなです。江戸初期から作られたと伝わり、戦前までは長女が生まれた家に親戚が贈る習わしでした。鹿児島県伝統的工芸品にも指定される薩摩糸びなについて調べました。

鹿児島ブランドショップで販売される糸びな

小澤人形の薩摩糸びな

麻のように丈夫に育つように

割り竹の芯に、麻糸の髪をおすべらかしのように垂らして頭とし、和紙の襟元を重ねた衣裳を着せ付ける。顔は描かれておらず、紙と麻という質素な材料で作られているのに、薩摩糸びなには優美で凛とした趣があるから不思議だ。

薩摩糸びなは戦前までは市販の商品のほかに家庭でも作られ、長女の初節句のお祝いに贈られたものだった。贈られた家では雛壇に立てかけて並べて飾り、その数を競った。元々は単に紙雛と呼ばれ、明治から大正期にかけて今の形に近い糸びなになり、髪に麻が使われていることから「生まれた子が麻のように丈夫に育つように」と願いが込められるようになった。

衣裳に描かれたきらびやかな絵は垂絵（たれえ）と呼ばれる。垂絵は作る人によって一つとして同じものにならず、世界で一つだけのお雛様が出来上がる。絵柄には今は梅の花や藤の花、高砂が描かれるが、昔は木版墨摺りの歌舞伎絵に泥絵具で彩色を施したものなどもあった。

残していくために～作り方を伝える

薩摩糸びなは昭和末期に一度途絶えかけたが、小澤人形の創業者・小澤寿美子さんが復活させ、現在は娘である新山禮子さんが唯一の作り手として制作を続けている。

新山さんによれば、母・小澤寿美子さんは日本人形作りの基礎やフランス人形、木目込人形の技術を学び、人形師として仕事をしていた。そんな小澤さんに、鹿児島県から薩摩糸びなを復活できないかと相談があったという。また、小澤さん本人にも次女だったために糸びなをもらえなかったという思い出があった。そこで自分がやらねばと制作に着手し、古い糸びなや史料を参考にしながら現在の薩摩糸びなを作り上げた。

現在、新山さんは薩摩糸びなを県内外に広く知ってもらうための普及活動にも取り組んでいる。毎年桃の節句の前には、鹿児島市内にある文化施設・かごしまメルヘン館で薩摩糸びなの手作りワークショップを開催。孫に作ってあげたいというシニアのご夫婦や子供連れのお父さんなど、参加者も幅広い。去る10月には「燃ゆる感動かごしま大会」の閉会式に来県された高円宮妃殿下に糸びな作りを伝授した。今後の広がりにも期待だ。

取材協力　新山禮子さん（小澤人形）／**監　修**　林　直輝さん（日本人形文化研究所所長）
参考文献　『新装普及版 郷土玩具辞典』（1997年、東京堂出版）、『全国郷土玩具ガイド4 四国九州』（1993年、婦女界出版社）など